



特集

小城炭鉱のボタ山(旭ヶ丘・池ノ平周辺)



山口鉱山別府炭鉱坑口

年表

寛延元年(1748)

多久の古文書に油石(石炭)を船積みして海路で運ぶ記述がある。

明治36年(1903)

唐津線が全線開通し、石炭輸送の主役が川船から鉄道に替わった。

明治43年(1910)

三菱鉱業株式会社、東多久村古賀山地区の鉱区を取得。

大正6年(1917)

三菱古賀山炭鉱が開坑し豊坑やぐらが建てられる。

昭和15年(1940)

小城炭鉱が開坑する。

昭和20年(1945)

太平洋戦争が終結する。

昭和25年(1950)

朝鮮戦争が起り、石炭の需要が拡大して価格も高騰した。

昭和27年(1952)

朝鮮戦争が停戦し、石炭需要が激減し不況となって、炭鉱でもストライキが頻発した。

昭和29年(1953)

多久五ヶ町村が合併して多久市が発足した。

昭和30年(1954)

「石炭鉱業合理化臨時措置法」が制定され、炭価引き下げのための合理化が一層推進され、中小炭鉱の閉山が相次いだ。

昭和37年(1962)

小城炭鉱が閉山する。以後、立山炭鉱、三菱古賀山炭鉱などが相次いで閉山した。

昭和47年(1972)

県内最後の炭鉱、新明治佐賀炭鉱が閉山した。

多久の炭鉱

閉山から50年の節目を迎えて

歴史

多久の振興を支えた炭鉱

多久の古文書で「石炭」の言葉が初めて出てくるのは、宝暦元年(1751年)の『御屋形日記』。当時は地面に表出した石炭を掘る「露天掘り」が主流で、石炭は薪の代わりに自家用の燃料として使われていました。

時代が進み、軍用蒸気船の燃料など石炭の用途が大規模化・多様化していくと、大量の石炭採掘が行われ、筋原と唐津をつなぐ鉄道が開通。さらに大手資本が参入し、活発に採炭されました。

最盛期を迎えたのは、昭和35年。『通産省全国

多久の歴史を語るうえで欠かせない炭鉱。古くは江戸時代中期の記録が残り、明治から大正、昭和にかけてあゆみを進め、多久の主要産業として隆盛を極めました。炭鉱閉山から50年。今回の特集では、当時の活気あふれる多久の様子を振り返ります。

石炭要覧

で、三菱古賀山炭鉱、明治佐賀炭鉱を中心とした多久の出炭能率が、1カ月間で従業員1人あたりなんと40トンと、日本一を記録しています。

その頃には、炭鉱では採炭、坑内の安全管理、機械整備、石炭の選り分けなど多岐にわたる業務が行われ、一大産業として多久を支えました。

ところが、その後のエネルギー革命によつて主要燃料が石炭から石油へと転換すると、次々と炭鉱が閉山。華やかに栄えた多久の炭鉱の歴

史に幕が下りました。